Ⅲ 武士のおこり

(1) 遠流の国・土佐

遠流の国　土佐は、都から遠く、交通もたいへん不便でしたから、724年、流刑の制が定められた時以来、伊豆（静岡県）安房（千葉県）佐渡（新潟県）などとともに、数多くの重罪人が流されてきました。奈良・平安時代では、石上乙麻呂・大伴古慈悲・道鏡の弟—淨人・菅原道真の子—高視・紀夏井・藤原師長などがおり、鎌倉時代までに文献にでてくるだけでも、60人もの人たちがいました。中には、高い文化を身につけた身分のある人たちがいて、土佐の国に都の文化を伝える役割を果たしました。

源頼朝の弟—希義　希義は、頼朝の弟で、平治の乱の時、平氏にとらえられて、土佐の介良荘（高知市介良）へ流され、そこに20年ほど住んでいました。1180年、頼朝が関東で兵をあげると、それに応じて希義が立ちあがることに不安をいだいた平氏は、蓮池家綱・平田俊遠らに、希義を討たせようとしました。

源希義討ち死の地（鳶ケ池中学校正門北）

希義は、日ごろ交わりのあった香美郡夜須荘の豪族、夜須行家をたよっていくとちゅう、年越山（南国市）で追っ手と戦い、討ち死にしました。介良の僧琳猷上人は、その死を悲しみ、頼朝の助けによ

って西養寺を建て、希義をとむらいました。西養寺は現在廃寺とされ、墓の卵塔だけが残っています。

行家は、希義の戦死を知ると、手結（香南市夜須町）から、海路紀伊（和歌山県）へのがれて、さらに関東へと向かいました。のちに頼朝の命令により、源氏の武士たちとともに、家綱・俊遠らを討ちとり、もとの領地を得ることができました。

承久の変―土御門上皇　1199年の源頼朝の死後、後鳥羽上皇は、幕府のあとつぎ争いのうちわもめを見て、幕府をたおし政権を朝廷にとりかえそうとしました。そして、1221（承久3）年に兵をあげましたが、幕府にやぶれてしまいました。この承久の変のあと、幕府は後鳥羽上皇を隠岐へ、順徳上皇を佐渡へ、土御門上皇を土佐へ流罪にしました。

土御門上皇は、野根山（安芸郡）をこえたあと、幡多へやってきました。そして、1223年、阿波（徳島県）に移るとちゅう、月見山（香南市香我美町）で月をながめて、次のような歌をよみました。

鏡野やたが偽りの名のみして
　　恋ふる都の影もうつらず

（この鏡野という美しい名まえは、ただいつわりの名ばかりなのか。恋しい都の影もうつらないことよ。）

阿波に移った上皇は、1231年、37才でその一生を終え、時代の尊い犠牲となりました。

土御門上皇の碑（月見山）

(2) 土佐の守護と地頭

守護と地頭　1192年、源頼朝は、鎌倉を根拠地として幕府を開き、武家政治をはじめ、国ごとに守護を、各地の荘園には地頭を置きました。土佐は源氏と関係が深かったので、早くから幕府の力がおよんでいました。土佐に置かれた守護としては、梶原朝景が最初ではないかとみられ、続いて佐々木・豊島・三浦氏などが活動したといわれていますが、その所在地は明らかではありません。

鎌倉時代の末期、幕府の力が弱まってきたころ、執権北条高時がみずから守護となり、安東氏を守護代として、土佐を支配していたこともあります。

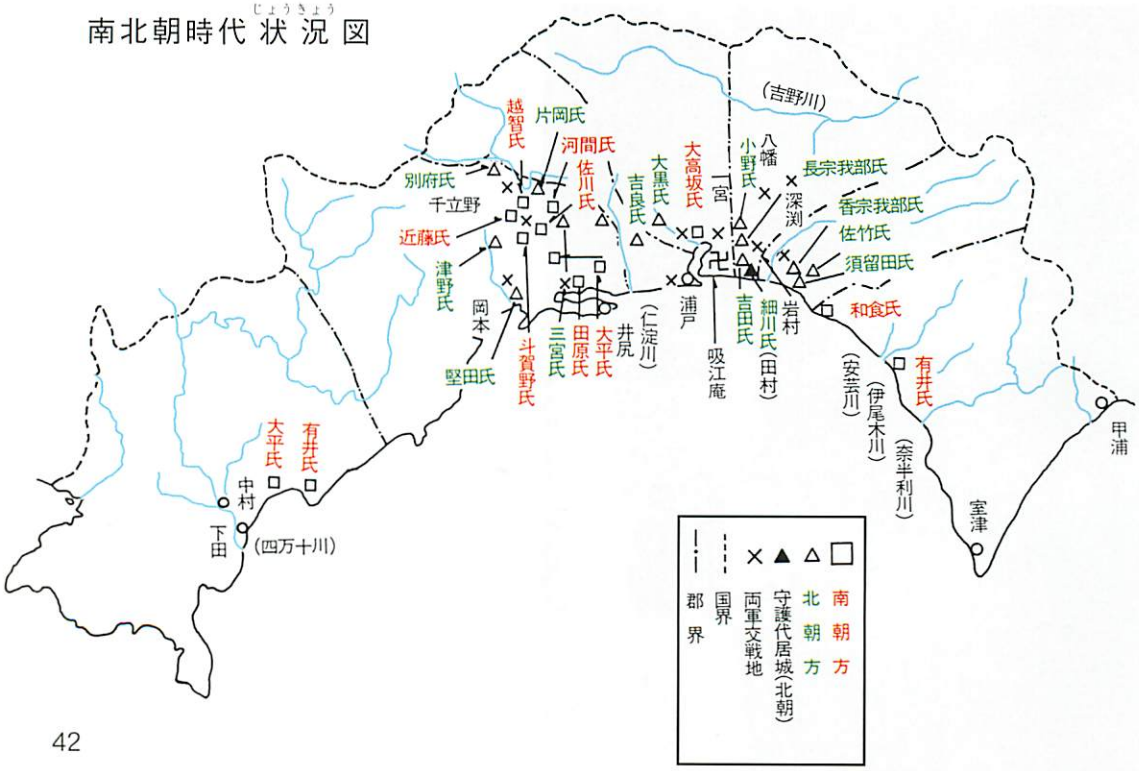
地頭は、おもに年貢の取りたてにあたりましたが、平家の滅亡や承久の変のあと、多くの領地が幕府のものとなったので、東国の武士たちは、西国の地頭に任命されて移ってきました。中原秋家もその一人で、1193年、香美郡宗我・深渕郷（香南市野市町）の地頭に任命され、秋家はのち香美郡山田に移り、子孫は山田氏と称しました。

香宗我部氏代々の墓（香南市野市町）

秋家と共に土佐にきた秋通は、秋家から地頭職をゆずりうけ香宗我部氏と称しました。香宗我部氏は、香宗川下流の水田地帯をひらいて香宗土居城を中心に領主としての権力をうちたてていきました。

このころ、長宗我部氏も信濃（長野県）から土佐に移り、地頭として活動するようになりました。

南北朝のあらそい　60年間あまりの南北朝時代、土佐でもおもな豪族たちが南朝、北朝にわかれて争いをくりかえしていました。そのころ、土佐は足利氏方の武将、細川定禅によっておさめられていました。北朝方の中心勢力は、野市の香宗我部氏、岡豊の長宗我部氏、高岡郡の津野氏などと多く、南朝方の中心勢力は、大高坂山（いまの高知城）に城を築いた大高坂松王丸や高岡郡佐川の河間光綱、近藤知国、斗賀野又太郎などでした。

南北朝の戦いの中で、一番はげしい戦いは、1336年から5年間続いた大高坂城の戦いでした。戦いのはじめのころは、北朝方の勢力が強く、大高坂城をとりかこんではげしくせめたてました。よく年、東国へ向かっていた後醍醐天皇の皇子花園宮満良親王の乗った船が台風のため流されて浦戸へつきました。この中に、すぐれた武将がいて大高坂城を助けたこともありましたが、松王丸も戦死して南朝方はほろびました。

南北朝時代状況図